

英語劇を取り入れた授業の効果

安藤 栄子

Eiko ANDO. The Effectiveness of English Drama on Students' Communicative Abilities. *Studies in International Relations* Vol. 35, No. 1. October 2014. pp. 41 – 49.

For about ten years my seminar students have performed a variety of English plays, including six from Shakespeare no less, for our annual college festival. The students, at the beginning of their play's rehearsals, and not unexpectedly, can do little more than struggle with the rote memorization of the lines their characters must perform. But as rehearsals proceed and the time for live performance nears, the student-actors learn that their lines have to be spoken with an idea and feeling for each character together with an understanding of their play's plot and story. The culmination is that through the ensemble of dramatic production, the students develop a much more dialogical relation to the English they are learning that pitches their acquired language closer to real communication. My paper then introduces learning English through drama as attested by my seminar students over the years, and shows the effect it has had on their motivation, confidence and communicative abilities.

はじめに

21世紀の今、世界ではますます「グローバル化」に拍車がかかっている。それに伴い社会ではコミュニケーション能力の必要性がより一層強く求められている。

このような社会的ニーズから日本の英語教育は「英語」について、それまでの伝統的な学校文法中心の考え方から、国際化時代を生き抜くための重要なコミュニケーション手段として捉えることにした。この大きな変更は当然平成10年度(1998年)の『学習指導要領』の改訂に生かされ「実践的コミュニケーション能力の育成⁽¹⁾」と明示された。そして現行の『学習指導要領⁽²⁾』(平成20年, 2008年)では、より改訂が進み小学校の5年生, 6年生が外国語活動としてコミュニケーション能力の素地を養うこと⁽³⁾, 中学校ではそれまでの2技能(聞くこと, 話すこと)に更に2技能(読むこと, 書くこと)を加えて, 4技能を総合的に活用できる力を身につけることが重要とされている⁽⁴⁾。高等学校では、単なる英語の会話力を養うのではなく小学校, 中学校の目標が達成されることにより, 言葉の働きを十分に配慮し, 的確な表現がで

きる総合的なコミュニケーション能力の育成が求められている。更に文部科学省では、初等中等教育段階からのグローバル化に対応した教育環境作りを進めるため、小中高等学校を通じた英語教育改革を計画的に進めるための「英語教育改革実施計画⁽⁵⁾」を平成25年(2013年)12月13日に公表した。

達成目標を明示した上で現行の『学習指導要領』では、「英語に関する各科目に共通する内容等」の項目で〔言葉の使用場面の例〕,〔言語の働きの例〕を挙げて教師にヒントを与えている。しかし、時間数やクラス・サイズをはじめ多くのさまざまな理由から実際には十分に目標が達成できていない。しかも、そのような状況は、大学の英語教育の現場ではより深刻な問題となっている。2003年に文部科学省から「『英語が使える日本人』の育成のための行動計画⁽⁶⁾」が出され、大学では「各大学が、仕事で英語が使える人材を育成する観点から、達成目標を設定」と述べており、具体的な目標は明示されていない。国際社会を担っていく現代の若者を育成することを目的とする本学部の英語教育の目的は、英語を用いて信頼関係を築いた上で対話ができる、すなわち内容あるコミュニケーション

ンができる人間を育成することである。しかし、思うように英語力が伸びず、英語を用いて自分の意見や考えを表現する力や対話力を十分に養うことが出来ずに悩んでいる学生は決して少なくない。

このような現状を少しでも改善する手段の1つとして筆者は英語劇の授業への導入を提案する。

1. ドラマ・メソッドと先行研究からみえてくるもの

i) ドラマ・メソッドとは

外国語を習得する過程でその対象言語を使って演劇を行うことによって語学力や自己表現力を養い、向上させる教授法すなわちドラマ・メソッドについては『英語教授法のすべて⁽⁷⁾』の中で次のように述べられている。

ハワイ大学のリチャード・バイア (Richard A. Via) による教授法なのでバイア・メソッド (Via Method) とも呼ばれる。ドラマ (演劇) を利用して外国語を教える方法である。この方法は従来のドラマ利用の外国語教育とは本質的に異なる。すなわち、従来の方法は外国語教育の中にドラマを導入して、学習効果を高めようとしているのに対し、バイアの方法はドラマそのものを通じて外国語教育を行おうとするものである。その他技術的な面においても従来の方法とはかなり違いがある。

バイアは元々はブロードウェイ (Broadway) で活躍し、25年以上に亘って演劇体験とその指導、更には第二言語としての英語教授体験をした人である。このような経験からバイアは外国語 (言語) 習得と演劇を行うことについて詳しく述べている。次の引用文はその一部である。

A play is written for communication between actor and actor and audience and actor. The drama method offers a chance for the students to use and understand the language from the gut level. They can become involved in the situation and discover the how and why of the

language. They are learning through the experience they had little or no culture shock. Through their drama experience they had already experienced many aspects of new culture. They had learned to use English for all communication. The drama method can give students the confidence in the classroom that they will need outside. —中省略—

A play can give students a reason to use the language. Students generally feel that it is artificial or showoffish to speak English when others are within earshot. If the “English only” rule is adhered to in the classroom, then the play and all discussion about the play will become a logical situation in which to use English. English then becomes the tool it is intended to be. If it is announced at the beginning of the course that the play will be performed on a given date, the students will have a goal to reach. Students with a definite, interesting goal progress faster and further⁽⁸⁾.

バイアの基本的な考えは次のようになる。1) 劇というものは、演技者間のコミュニケーション、または観客と演技者とのコミュニケーションが図られるべく書かれたものである。2) 演技する学生たちは演技の練習をする過程でどうして、何故そのことばを用いるのか理解し使っていく中でその言語使用に自信をつけていく。3) 劇は社会、文化的環境を作り出してくれる。教師はそうした知識を提供せずに言語学習を展開すべきではない。また、劇は言語の必要性を教えてくれる。4) 言語は文化であり文化と切り離して言語を使用することはない。文化がもたらす思考、感覚、考え、行為を無視しては言語習得は成り立たない。5) 演技者でもある外国語学習者は、外国語学習と劇の練習の段階では、失敗を恐れることなくリラックスした中でも集中した学習環境あるいは練習環境を必要とする。

さらにバイアは工夫を凝らした練習用のテキスト “TALK&LISTEN⁽⁹⁾” では実践的、具体的な方法を編み出し多くのヒントを提供している。現実

には、そうしたカード作りも面倒であったり、ドラマ化できる教材も少ない、などと言われるが、バイアは「せめて教科書の対話をT&Lのカード⁽¹⁰⁾にして少なくとも表情や動作を伴わせて学習させることが大事である。」と述べている。

ii) 先行研究からの考察

『英語劇指導マニュアル⁽¹¹⁾』は英語劇の指導・演出を行おうとする教師を対象に書かれている。具体例をたくさん盛り込んだ詳しくわかりやすい手引書である。

また、これまで英語劇を導入した授業とその効果について考察した研究論文が発表されている。ここでは、その中から小学生から大学生までの生徒・学生によって劇化され公演されて、英語力向上を目指したものをいくつか取り上げる。

- ①「英語劇を通して日本人児童に英語力を定着させる試み⁽¹²⁾」(米田佐紀子)では北陸学院小学校での英語劇への取り組みを紹介している。せりふに対して日常の授業でも敏感に反応するようになっている事実から劇を取り入れる頻度を高めることがコミュニケーションな英語力の育成と定着に繋がる可能性があるとしている。
- ②「表現力の育成をめざして－英語劇「夕鶴」を通して－⁽¹³⁾」は中学生(2年生)による英語劇上演を通して、表現力の育成と英語力の向上、そして人間的に成長することを目指し、その成果を詳しく述べたものである。練習不足から次回に活かしたい点を挙げつつも、最初の劇として目標を達成できたものとしている。
- ③「英語劇団The Peach Pitsの活動報告と授業への演劇の導入に関する一考察⁽¹⁴⁾」(中国学園大学)は英語コミュニケーション学科所属の英語劇団の活動報告である。自作スクリプトを用いた上演成果と今後の英語劇の授業への導入の問題点を挙げている。
- ④「劇を取り入れた英語授業の試みについての一考察⁽¹⁵⁾」では、「英語科教育法Ⅱ(英米文学)」の授業において劇を取り入れた英語の模擬授業を実践し、その効果と課題について述

べている。様々な問題はあるが、「演ずる」ことの経験を学生が自ら積極的に「楽しむ」ことで将来教師になったとき教える生徒のモチベーションをも高めることに繋がる、としている。これはとてもユニークな指導方法であると同時に重要なことである。

⑤「英語劇の上演と大学教育への応用⁽¹⁶⁾」では英文学科における英語劇の上演に基づいてその意義と大学教育への応用を考察している。

その他、本年度、本学部の教育実習生は実習校である中学校でのシェイクスピア劇*A Midsummer Night's Dream*『夏の夜の夢』の上演の手伝いをする機会を得た⁽¹⁷⁾。姫路獨協大学では授業「ワークショップA」の3,4年次生向けの授業⁽¹⁸⁾で、演劇を取り入れ、その報告がJACET⁽¹⁹⁾でなされている。

このように、ドラマ・メソッドは既に小学校教育から大学教育に至るまでの英語学習に導入され、その果たす役割は大きく、効果をもたらしている。身振り、手振りのジェスチャーや顔の表情を用いて、演技者はお互いにそれらをも理解しながら言葉のやり取りをする。これは真に本物のコミュニケーションである。だが、現実にこの指導方法が定着しているとは言い難い。たとえば、生徒の多くは「英語」が持つ強勢、リズム、ピッチなどが意味内容に違いをもたらすなどということはほとんど身につけずにきているのではないだろうか。先行研究の中でも時間数や評価の問題、外国人教師や他の教師との協力体制作りなど、様々な課題が挙げられている。

2. ゼミナール活動から発展した英語劇への取り組み

2.1 ゼミナール生による英語劇上演の歴史

筆者のゼミナールに共通した全体の目標は次のようなものである。

学問研究を進めながら英語の運用能力を高め、積極的なコミュニケーションができるように努めること。はっきりとした目的意識を持つ者同士と一緒に勉強し、お互いにより刺激を与えあうことのできる場、そしてことばの大切さを学ぶことが

できる場となるよう願うものである。

ゼミナール生が学修時間外の活動として、大学祭で初めて英語劇を上演したのは2006年で、今年度（2014年度）で9回目となる。英語劇上演以前は、アニメーション映画やアメリカのホームドラマ「フルハウス」などの吹き替えに挑戦していた。これらの体験では、演技力は求められないが自分の役柄を理解した上で、声の出し方、英語の発音、リズム、イントネーションそしてスピードなど英語による高度な表現力を求められた。特にせりふを映像に合わせなければならぬので、母語話者の日常会話の早いスピードに苦労した。しかし、こうした体験や合宿の協同学習が「英語劇を自分たちで演じてみたい」という夢を抱かせたのだった。そして学生たち自らが話し合っ、「やってみよう！」という結論に至ったのである。

夏期合宿は、毎年2泊3日間の日程で行っている。指導者は筆者と英語を母語とする教師が1名ないし2名である。まずは、英語を使ったゲームをする。それは英語学習のウォーミングアップと参加メンバーの意志の疎通を図るためである。その後協同学習としての英語劇（寸劇）の創作に取り組む。グループ毎に、予め与えられたいくつかの単語を使用するなど、条件の中でストーリー、せりふ、小道具など総てを創り上げ、演じて競い合う。2日間は、学年の壁を越えたグループで、全員が集中してアイデアを出し合い、創作を楽しむ。この合宿経験が大学祭での劇の上演に結びついていると言える。

この8年間に上演した作品は次の通りである。

平成18年度	<i>A Christmas Carol</i> 『クリスマスキャロル』
平成19年度	<i>High School Musical</i> 『ハイスクールミュージカル』
平成20年度	<i>The Merchant of Venice</i> 『ヴェニス商人』
平成21年度	<i>Julius Caesar</i> 『ジュリアス・シーザー』
平成22年度	<i>King Lear</i> 『リア王』
平成23年度	<i>Hamlet</i> 『ハムレット』
平成24年度	<i>A Midsummer Night's Dream</i> 『夏の夜の夢』

平成25年度 *Much Ado About Nothing* 『から騒ぎ』

なお、英語劇上演に際しての具体的な舞台作りについてはすでに研究ノート⁽²⁰⁾で述べている。例えば、普通教室を手作りの舞台と観客席に作り直すためには、先輩たちの工夫を活かしつつ、ゼミ生たちはアイデアを出し合い、少しでも良いものにしようと努力している。

2.2 英語劇上演までのスケジュール

次の表は2012年度のスケジュール表であるが、ほぼ毎年同様な計画のもとで練習を行っている。

月 日	内 容
2011年11月	『ハムレット』上映（2011年度実施） 次年度に何をやるのか話し合い（数回）を持つ
2012年1月	劇に決定
2～3月	春休み 各自作品探し
4～5月	作品の候補を挙げる 『ロミオとジュリエット』・『夏の夜の夢』・『オセロ』・『じゃじゃ馬ならし』 etc.
6月	『ロミオとジュリエット』か『夏の夜の夢』どちらかにする →作品決定『夏の夜の夢』 本の取り寄せ、英語版（原本）探し
7月	役決め、担当割り当て（衣装・大道具・音響・会計）
8月 （夏期休暇中）	合宿、せりふのカット作業、日本語台本作り→配布 各自でせりふを覚える
9月初め （夏期休暇中）	練習開始、大道具準備（背景、小物、衣装）、DVD版（映画）で作品の雰囲気をつかむ、各自でせりふを覚える
9月半ば （夏期休暇中）	台本の読み合わせ（日本語）、今後のスケジュールを決め、ゼミ生のスケジュール調整
9月後半 （授業開始）	①通し練習（週1回～3回くらい）、日本語および英語による場面ごとの練習（ほぼ毎日） ②発音チェック ③作品の理解を深める ④各自が演ずる役の人物考察 ⑤先輩からのアドバイス ⑥教員からの指導 ⑦音響・BGMづくり ⑧せりふと演技の完成度を高める
10月初め	通し練習をしながらビデオ撮影も行い、練習を録画してお互いの演技をチェックする

月 日	内 容
10月半ば～後半	パンフレットづくり, ビラづくり, ゼミ生紹介のポスターづくり, アンケート作成, ナレーション原稿作成
11月1日 (大学祭準備日)	舞台づくり (暗幕, 照明, etc.), リハーサル
11月2日 (上演1日目)	午前中 リハーサル 午後～ 公演→練習, 反省会, 先輩・教員からのアドバイス
11月3日 (上演2日目)	公演 (2回) →練習, 反省会, 先輩・教員からのアドバイス
11月4日 (上演3日目)	最終公演, 片付け

演劇練習のゼミ生は、多くの観客の前で演じ、役になり切るには「羞恥心を持たないこと」が重要であることを合宿での体験から頭では理解している。最初は十分な声も出ず、また立ち位置も定まらず観客席があることも意識していない。演技者たちだけが向かい合ってせりふの棒読みを続けている。しかし、大きな声で恥ずかしがらず、失敗を恐れないで演ずることの大切さを徐々に思い出し、再認識して、演技に集中しようと努力するようになる。寸劇（10分～15分）とは違い、上演時間は例年1時間半から2時間ぐらいである。普段まったく経験しないシーンでの演技も求められ、演技者は悩むことが多い。毎回アンケートを取っており、例えば『夏の夜の夢』の中では次のような回答をしている。

せりふはどのようにして覚えましたか？

- 今年、ただ黙々と台本を見ながら、つぶやいてせりふを暗記することの他に、DVDや音声を使った。例えば、映画化されたDVDを見て、英語字幕と一緒にシャドーイングしながら覚えたり、BBCラジオ（外国人教師が提供してくれた⁽²¹⁾）の音声を聞きながらせりふを覚えた。
- 台本を友人に渡し、確認してもらいながらせりふを言う、という練習もやった。
- まずは一通り紙に書き出して、それを見て発音練習をしたり、日本語と照らし合わせた。自分の役であるハーミアのせりふのみを書き

出して小冊子のようなものを作り、それを度々見るよう心掛けた。

発音、イントネーションはどの程度まで習得できましたか？

• 台本をもらいたての時は、見たことのない単語ばかりだったので、電子辞書で引き、発音を聞いて覚えた。次に外国人教師に随時発音やリズムの確認をしてもらった。せりふをすべて言えるようになってからは、外国人教師にそのシーンごとの雰囲気や自分が演ずる人物の気持ちなど、細かい部分の質問をし、参考にしながら自分もそのシーンの雰囲気に合わせ、強く発音してみたり、ゆっくりしゃべってみたりと、練習した。

• rとlの発音や二重母音が意識しないと忘れてしまうので難しかった。意外と人の名前の発音も意識しないといけなかった。一方、イントネーションは発音以上に難しくなかなか習得できなかった。特に、前置詞などの弱く発音するところは、感情が入ってしまうと全て強く言ってしまうこともあった。

• 発音記号の知識があまりなく、舌の使い方などとても難しかった。先生からご指導頂き、何度も何度も練習したが、意識しないと忘れてしまうし、逆にしすぎるとスムーズに口が回らず、とても苦労したと同時にいかに発音やイントネーションで聞こえ方が変わるのかを改めて実感した。

自分のせりふで特に難しいと思ったところはどこですか？

• 特に最後のせりふである。rhymeを考えながら話さなければならないし、劇をしめるせりふだったのでとても難しかった。どういうふうにしたらいいか、どんな動きをすればいいか感情の表現はどうすればいいかなど、すべてがほんとうに大変だったし、難しかった。

せりふ以外に苦勞したことはなんですか？

- 2役をやったので、役の切り替えに、特に苦勞した。イジラスは老人で怒りの感情の多い役。一方、フルートは若者で明るい役柄だったので、感情の切り替えが難しかった。対策としては、特徴を表す小道具（つえ、カツラ）や服装で気持ちを切り替えるなど、とにかく練習を繰り返して、役になりきるようにした。
- 舞台の上で自分のせりふがない時の表情が難しかった。

大学祭が近づくとつれて、ゼミ生たちは自分のせりふや演技の完成を目指して必死に練習を重ねる。毎日夜遅くまで続き、中には体調を崩してしまう学生もいる。だが一方で、英語に集中するため、他の授業の英語学習も楽しくなる学生もいる。

2.3 外国人教師の導入と先輩の協力

先行研究からの考察で取り上げた「英語劇を通して日本人児童に英語力を定着させる試み」の中でも外国人教師と日本人教師が協力することで英語劇の劇化を行っていると述べられているが、筆者のゼミナールにおいても、一昨年よりイギリス出身の教師が合宿と英語の指導に大きく貢献している。時間が許す限り、ゼミ生たちの練習を見守り、彼らが演技に苦勞したり、発音がうまく出来ない時には自らが実際に発音を繰り返して手本を示してくれる。主に筆者は個々の単語の発音指導、文法的説明や内容説明をするのに対して外国人教師は、より細かな感情を込めたせりふの言い回し、文章の中の強弱のつけ方、イントネーション、リズムなどを懇切丁寧に教える。また、大学祭の上演期間中は、すべてを観て終了後には毎回アドバイスを与える。『ことばを鍛えるイギリスの学校—国語教育で何ができるか⁽²²⁾』の中でも述べているように、イギリスの学校では小学生の頃から劇を演ずることに慣れ親しんでいる。こうした文化背景を持つ外国人教師とのチームティーチングは非常に高い効果をもたらすものと思われる。

これまでは2学年の総勢30名の参加があり、大勢で、お互いの演技について話し合っていてき

た。しかし、2013年度は学部の改組の事情から3年生のみの上演となった。彼らはとても不安を感じていたが、練習を始めると4年生が交替で見守りつつ、アドバイスをし、演技を一緒に考えてやって見せていた。また、練習中に体調を崩したり、アルバイトなどで参加できない後輩については常に代役を務めてカバーをしている。

毎年、総仕上げの段階では、筆者の他に、外国人教師、4年生全員の参加を得て、多くの批評や注意点、アドバイスが与えられる。出演者たちは全員で話し合い、より良いものを創る努力をしている。時には先輩の家で、自分の役や演技の相談に乗ってもらうこともある。

2.4 なぜシェイクスピア劇なのか

2.1で述べた通り、平成20年度から平成25年度までの6年間に亘り、ゼミナール上演作品はすべてウィリアム・シェイクスピア(William Shakespeare, 1564-1616)のものである。これは筆者が決めたことではなく、ゼミ生たちが毎年話し合いの中で決定したものである。では、なぜそのような選択になったのだろうか。やはり一番大きな理由は普段から学年を越えたゼミナール生たちの関係が極めて親密であり、授業外でも頻繁にコミュニケーションをとっていることによるものであろう。また、ゼミ生の中にはイギリスに研修や旅行に行った機会に、シェイクスピアの故郷であるストラットフォード・アポン・エイヴォンを訪れ、観劇を楽しむ。またケンブリッジ大学のカレッジの庭で演じられるシェイクスピア劇を見ては、後輩に話す。留学先でシェイクスピアに関する講義を受けるなど、その影響は実に大きいのではないだろうか。このような環境からゼミ生は作品を決めていると思われる。

『英語劇のすすめ』では教育とドラマについて次のように述べている。

秀れたドラマは、楽しませかつ教えるものでなければならないのです。演劇を体験することによって、楽しみを得ると同時に、またその体験によって、より高められるものでなければなりません。教育の中でのドラマを考

えるとすれば、その最も確かな基盤は、ここに存在すると思うのです。—中省略—生徒は、「もし私だったら...」と劇中の人物と自分を想像の中でidentifyすることによって、いわば劇の中にある生を内的に体験するのであって、その体験を通して、自分と他人と社会についての思索を深め、人生を理解してゆくのです。だからドラマをやろうとする時、教師の側でも生徒にも、この「体験することによって調べよう」とする態度が必要であり、またそれを可能にする戯曲、チャレンジを感じさせる活動が必要です。本当の意味で「楽しい」とは、このことをいうのでなければならぬと思うのです⁽²³⁾。

筆者は決して上演作品がシェイクスピア作品でなければならない、などと言うものではない。まずは、ゼミナール生がやってみたい作品を選べばよいと考えている。

しかし、シェイクスピアの作品及び劇については多くの日本人が「それは難しいもの」と思っていることから、「なぜそんな難しいものをやるのか?」「時間ももったいないのではないのか?」「もっと違うものを選ぶべきではないのか?」などと質問される。それは次のような理由からであると思われる。

シェイクスピア作品の原書を手にしてまず驚かされるのは、そこは「英語の言葉の海」であるということ。しかも現代英語ならともかく、17世紀の古い英語で書かれ、なおかつブランク・ヴァース（無韻詩）の弱強五歩格で劇的效果を生み出す手法で書かれたせりふ。英文学専攻でない限り、目にすることのない英語である。

では、シェイクスピアの英語・せりふをどのようにして覚え、自分のものにしたらよいのだろうか。学生たちは各自が自分に適した方法、例えば、BBCや映画による音声を聴きながら覚えるなどを考え出して相当の努力で身につける。そして練習を重ねていく中で長いせりふを周りの仲間が集中して聴いてくれるようになると、断然自信がついてくる。ただ、練習課程で外国人教師が、あまりにも長い文章などはカットして編集をし直すこと

もある。

また、シェイクスピアの作品は、言うまでもなく人間観察が鋭く、時代を越えて変わらぬ人間性の問題を語っている。学生たちの人生経験はまだ浅く、全てを理解できなくとも、必死で考え、想像し、とりあえずは自分なりの役柄を演じてみる。この体験、挑戦は決して時間の無駄ではないはずである。また、シェイクスピアの絶妙な、巧みな言語表現、そして機智はことばの魅力を存分に教えてくれるはずである。

3. 成果と課題

毎年ゼミ生はプロの舞台監督や演出家もいない環境の中で「すべて手作りの英語劇」を創り出している。英語のせりふを覚えるためには様々な機器を使い、筆者及び外国人教師には発音、リズム、イントネーションのチェックをしてもらい覚えていく。自分の役柄、人物についての理解、対話相手との間の取り方、声の大きさ、複雑な感情の表わし方、演技方などなどマスターしなければならないことがたくさんある。しかしこのような体験が英語学習への取り組み方を大きく変えてくれるものと信じた。これからの他の学習面においてもそれは大いに活かされるであろう。

アンケートには次のような回答が述べられている。

英語劇をやったことが何かプラスになりましたか？

・大学生活の中で初めてというくらい真剣になった活動だったと思う。最後までやり遂げたことは自信にも繋がると思う。初めの頃は劇をやるのが嫌で練習にもあまり参加せず迷惑をかけた。しかし練習を一緒に頑張ろうと言ってくれるゼミ生のおかげで練習にもちゃんと参加するようになり、やる気も出てきた。劇の練習をやっていく中で始めは同じシーンに出る人や、4年生の先輩に言われるがまま、演技をしていた。しかし、一回目の公演が終わった後くらいから「見ているお客さん達を

もっと楽しませたい」という気持ちが生まれ自分で改善点などを考えるようになった。どのようにすればもっとお客さんが笑うのだろうかということを考えてたりして、みんなに提案した。

・1つは英語力の向上である。練習期間中は毎日英語を話していた。それだけではなく仲間の英語も聞いていたので、ラスト1ヶ月ぐらいからほぼずっと英語に触れている状態だったので、自分の口で発音し、耳で聞くことが日常的になったので、英語との距離が縮まったと感じた。

母語である日本語と著しく異なる英語で書かれたイギリスのエリザベス朝時代のシェイクスピア劇のせりふを単なる暗記ではなく、自分のことばとして述べる、この点だけでも相当な努力を要するものである。そのせりふには、発音、アクセント、リズムそしてイントネーションなど、音声学の授業の中でさえも十分な練習が出来ないことを短期間中に習得しなければならない。その上、感情を抱きながら演技をしなければならない。特にシェイクスピア劇は何よりも「ことば」が中心である。バイアが英語学習に劇を取り入れるのは、対話をし、真の意志の疎通を図って、はじめて言語を習得できる、としていることはまさにこの点である。そして観客はイメージーションを働かせて、劇を楽しみ、演技者もその反応から達成感を覚える。

このような効果的な英語学習への劇の導入であるが、問題は通常の授業の中では、どのように行っていくことができるのか、ということである。

本論文は筆者の「ゼミナール」の授業活動から発展した英語劇上演による成果を踏まえ、英語の授業への劇の導入を積極的に進めたいと考えているものである。しかし、現実的には舞台上で演ずる大がかりな英語劇上演を数多く行うことは極めて難しい。本学部では、英語の授業は、一斉同時開講としている。英語を担当する指導者の多くは外国人教師である。このような環境を生かしワークショップなどの話し合いで賛同を得て、各クラス毎に短い英語劇を上演し、観賞し合うことなどは

できないだろうか。また、プロの英語劇を観賞する機会を設けることなども考えられる。本学部では以前こうした行事も設けており、ゼミ生たちは食い入るように見て、そこからいくつかアイデアを得ていた。更に、難しいことではあるが、英語関連科目などのいくつかの科目がコラボレーションすることで一人でも多くの学習者が英語劇上演から真のコミュニケーション能力を習得してほしいものである。

注

- (1) 文部科学省 小・中学校『学習指導要領』平成10年改訂, 高等学校『学習指導要領』平成11年改訂
- (2) 『小学校学習指導要領』第4版—平成20年3月告示, 東京書籍, 2009年
- (3) 本文「外国語を通じて, 言語や文化について体験的に理解を深め, 積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り, 外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら, コミュニケーション能力の素地を養う」
- (4) 本文「外国語を通じて, 言語や文化に対する理解を深め, 積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り, 聞くこと, 話すこと, 読むこと, 書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う」
- (5) 文部科学省「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」
http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/_icsFiles/afieldfile/2014/01/31/1343704_01.pdf 平成25年(2013年)12月13日
- (6) 文部科学省「『英語が使える日本人』の育成のための行動計画」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/siryu/04031601/005.pdf 平成15年(2003年)3月31日
- (7) 伊藤嘉一『英語教授法のすべて』大修館書店, 1994年, 165-166頁
- (8) Richard A. Via “*English in Three Acts*” East-West Center University Press of Hawaii, 1976,

pp.6-7.

- (9) Richard A. Via “Talk and Listen: English As an International Language Via Drama Techniques: Students’ Book” Prentice Hall College Div, 1983.
- (10) *Ibid.*, p.2-3. 対話の練習用のカードは、パート別にせりふが書かれており、まずは自分のせりふだけを完全に覚えられるように工夫されている。

Lesson One: B
PART ONE
A.
B. I think I do.
A.
B. I’m afraid I can’t remember the whole line without reading.
(以下省略)

Lesson Two: A
PART ONE
A. I don’t understand why we have a relaxation exercise.
Do you?
B.
A. We don’t even speak. We’re not learning English.
B.
(以下省略)

- (11) 佐野正之「英語劇指導マニュアル」玉川大学出版部, 1990年, 57-133頁
- (12) 米田佐紀子「英語劇を通して日本人児童に英語力を定着させる試み: コミュニケーション能力からみた発音・語彙・文型の定着を目指して」『北陸学院短期大学紀要』第40号, 2008年, 65-84頁
- (13) 真尾正博「表現力の育成をめざして」『トータル英語教育17』1983年4月, 8-12頁, 『トータル英語教育18』1983年6月, 8-16頁, 『トータル英語教育19』秀文出版, 1983年11月, 1-4頁
- (14) 佐生武彦・橋内幸子・垣見益子「英語劇団

The Peach Pitsの活動報告と授業への演劇の導入に関する一考察」『中国学園紀要第5巻』, 2006年, 59-64頁

- (15) 丹羽佐紀「劇を取り入れた英語授業の試みについての一考察: 効果と課題を探る」『鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要』第22巻, 2012年, 75-81頁
- (16) 日高真帆「英語劇の上演と大学教育への応用」『京都女子大学英文学会英文学論叢』第56号, 2012年, 10-16頁
- (17) 2014年6月1日～6月21日神奈川県逗子市(私)S学院中等部にて
- (18) 吉本和弘「英語劇の舞台公演による英語学習(Others, 国際交流「新」時代における大学英語教育カリキュラム刷新」『JACET全国大会要綱 48』, 2009年, 255-256頁
- (19) The Japan Association of College English Teachers (大学英語教育学会)
- (20) 安藤栄子「ゼミ活動から発展した英語劇が育むもの」『国際文化表現研究』第9巻, 2013年, 335-352頁
- (21) Shakespeare, William. *A Midsummer Night’s Dream*. Dir. Celia de Wolff. BBC Radio 3, first broadcast Sunday 11 September 2011. MP3.
- (22) 山本麻子『ことばを鍛えるイギリスの学校—国語教育で何ができるか』岩波書店, 2007年
- (23) 佐野正之『英語劇のすすめ』大修館書店, 1977年, 14頁